



琵琶湖周航の歌

今津町教育委員会生涯学習課
主 事 門野 晃子

はじめに

「我は湖の子さすらひの…」の歌詞ではじまり、現在では滋賀県の代表的な歌としてあまりにも有名な琵琶湖周航の歌は、第三高等学校（現京都大学）の水上部の愛唱歌として、大正6年（1917）につくられました。以来80年あまり、琵琶湖周航の歌は滋賀県のみにとどまらず、多くの場所で多くの人々によって歌い継がれてきました。また一般の人々の耳に馴染み深くなったことには、加藤登紀子をはじめ何人かの歌手によってレコードが出されヒットしたことも影響しています。さらに現在では、カラオケで必ず琵琶湖周航の歌を歌うという人のいることや、滋賀県出身者の集まる宴会の最後は琵琶湖周航の歌の合唱が定番、というようなことも、若い世代の人々にこの歌が伝わっている大きな要因なのかもしれません。

三高の琵琶湖周航

第三高等学校（以下、三高）の琵琶湖周航

が始まったのは、明治26年（1893）4月1日のことでした。この時の周航記によってコースをたどってみましょう。

大津三保ヶ崎で新艇三隻の進水式・部員たちの壮行式のあと、いよいよ周航に出発、この日は北比良（志賀町）に到着し柳屋という旅館に宿泊しました。2日は北小松（同）に寄港した後、勝野（高島町）で上陸、小川村（安曇川町）の藤樹書院を訪ねて再び乗船し、今津に到着、福田屋に宿泊しています。3日は今津を出発して竹生島に上陸、その後一旦塩津（西浅井町）に寄り、飯ノ浦（木之本町）に上陸、賤ヶ岳に登った後再び乗船し姉川の岬を回って長浜に到着、井筒屋に宿泊しています。4日は磨針峠に登った後彦根に上陸し、彦根城を見学の後、八幡へ向かおうとしましたが、琵琶湖はこの日波が高く、艇は浜に打ち上げられてしまったので、予定を変更して彦根の松月亭に泊まりました。5日は沖の白石、多景島を眺めながら南下し、沖島を経て三保ヶ崎に帰りました。



琵琶湖周航の航路

この初めての周航は、その後の三高の琵琶湖周航の基本的なコースとなり、翌年から三高の校内水上大運動会が琵琶湖で行われたこともあり、ボートに親しむ生徒は年々多くなったようです。琵琶湖周航を行うのは水上部の生徒に限ったわけではなく、クラスの有志たちや寮の仲間とクルーをつくることもよくありました。琵琶湖周航は長距離競漕の訓練でもありましたが、多くの学生は、湖上の風景や気楽な湖上の旅を楽しむことをおもな目的として、夏休みなどを利用し周航に出たのです。

周航のコースは、天候や日程の違いで変更されることも多く、また昭和6年(1931)以降は湖西の浜大津―今津間に江若鉄道が開通したことで、自然と周航の途中で立ち寄る名所・旧跡も変わっていったようです。

こうして行われてきた三高の琵琶湖周航のなかで、琵琶湖周航の歌は水上部員の小口太郎らによって作られたのです。

小口太郎をメンバーに加えたクルーの琵琶湖周航は、大正6年と7年、どちらも夏休み中の6月に行われました。

当時のメンバーなどの証言によると、太郎は1回目の周航、すなわち大正6年にはすでに琵琶湖周航をもとにした詞を作っていて、周航途中の2日目の夜、宿泊した今津の宿で、友人たちに発表したといます。三高水上部には当時いくつかの部歌がありましたが、太郎ら新しい時代の青年は時代にあった部歌を自分たちの手で作ろうとしたのでした。

この時の周航は3泊4日にわたり、1日目は大津を出発して雄松(志賀町)で宿泊、2日目は雄松から北上して今津に着き宿泊、3日目に竹生島に上陸した後長浜へ立ち寄り、彦根に宿泊、4日目には長命寺に寄って大津へ帰港しています。この周航と翌年、再び行った琵琶湖周航で、太郎は6番まで続く琵琶湖周航の歌を完成させたということです。

おぐちたろう よしだ ちあき
小口太郎と吉田千秋

琵琶湖周航の歌の作詞・作曲者は長い間、小口太郎とされてきました。しかし近年の調査で、太郎が今津の宿で発表したのは詩のみで、曲は吉田千秋という人物がつくった「ひつじぐさ」という曲であるということが明らかになっています。

小口太郎は明治30年(1897)8月30日、長野県岡谷市で生まれました。家のすぐ近くには諏訪湖があり、太郎は幼いときから湖に親しんで育ったようです。小学校時代は「開校以来の秀才」と評判で、作文や詩を作ることには大得意でした。また家族全員が音楽好きで、現在も生家には太郎が愛用したというバイオリンと尺八が残されています。諏訪中学を卒業後、1年間の代用教員生活を経て、大正5年(1916)9月に三高理学部に入学した太郎は、水上部と弁論部に属するとともに、当時市内在住者以外は義務づけられていた寮生活を送ることになりました。ここで学生たちによって作られた、いくつかの寮歌に接し、太郎自身も学生のための歌を作ろうと志すようになったようです。大正8年、三高を卒業した太郎は、東京帝国大学(現東京大学)理学部物理学科に入学、長岡半太郎らの指導を



小口太郎

受け、在学中に「有線及び無線多重電信電話法」を発明、特許の出願をしています。大学を卒業後は東京帝国大学航空研究所に入所し、寺田寅彦らの指導のもと顕微鏡の研究を進めました。大正12年、徴兵検査に合格した太郎は航空研究所を退職して帰郷、年末には松本連隊へ入営の予定でしたが、翌13年に病気の治療のため東京の病院に入院、5月16日、28歳の若さで亡くなりました。

「ひつじぐさ」の作曲者・吉田千秋は、明治28年（1895）2月28日、新潟県新津市で生まれました。父吉田東伍は『大日本地名辞書』の編さんで名高い歴史地理学者で、千秋の生後間もなく、両親は東京で暮らすようになりました。千秋は祖父母の住む新潟と東京を転々としますが、幼いころから結核を患い、入院生活を送ったこともありました。しかし学生時代の千秋は活発で利発、また語学が得意で、15歳のときにはイギリスのペンパルクлубに入会するほどでした。明治45年、東京農業大学に入学した千秋は、そのころから音楽・語学関係の雑誌に投稿を始めるようになりました。大正2年に病状の悪化で大学を退学した後は、音楽への興味を高めるとともに、当時流行し始めたばかりのローマ字の普及運動に参加し、雑誌「ローマ字」に自身の研究成果を次々と発表しました。その「ローマ字」9月号には千秋がイギリスの童謡「WATER-LILIES」を訳詞した「ひつじぐさ」が載せられています。千秋は、大正4年、この「ひつじぐさ」の訳詩にみずから曲をつけ、雑誌「音楽界」8月号に発表しました。これが琵琶湖周航の歌の原曲となる「ひつじぐさ」です。その後も千秋は作曲を続け、「音楽界」にいくつかの作品を残していますが、結核の病状は悪化する一方で、父東伍が死去した翌年の大正8年、生まれ故郷の新津市大鹿で永眠、わずか24歳でした。



（裏面）

太郎から出されたはがき

（表面）

このように同世代に生き、ともに夭折した2人の青年によって、琵琶湖周航の歌は作られました。もちろん太郎と千秋は生前にお互いを知る由はなく、まして自分たちの作った詩や曲が、これほど長く多くの人に歌われる有名な歌になるとは想像もしていなかったでしょう。

太郎が琵琶湖周航の歌の詩を今津の宿で友人に発表したとき、クルーのメンバーであった谷口謙亮が、当時三高の「桜楽会」という音楽グループの紹介によって学内で流行していた「ひつじぐさ」のメロディーで歌ってみると大変良く合った、というのが太郎の詩と千秋の曲を結びつける発端となったのです。

琵琶湖周航の歌の町づくり

長野県岡谷市の小口太郎の生家には、太郎が琵琶湖周航の途中に友人の小玉博司に宛てて書いた一枚のはがきが残されています。はがきは三高の寄宿舎に送られましたが、小玉は帰省中で受け取ることができず、周航から帰った太郎の手に戻ってしまったもののようです。文面は

「昨日は猛烈な順風で殆ど漕ぐことなしに雄松迄来てしまった。雄松は淋しい所で松林の中に一軒宿舎があるだけだ。羊草の生へた池の中へボートをつないで夜遅くまで砂原にねころんで月をながめ美人を天の一方に望んだ。今朝は綱引きをやって面白かった。今夜はこの今津に宿る。



今津港と歌碑

今津で 小口」

となっていて、消印は大正6年6月28日の今津郵便局、裏面の絵は太郎自身が雄松の風景を描いています。

さきにも述べたように、琵琶湖周航の歌が太郎らの一行が今津の宿に泊まったときに初めて披露されたということは、これまでの調査で知られていましたが、太郎自身の手で「今津に宿る」と書かれ、今津郵便局から送られたこのはがきは、「琵琶湖周航の歌開示の町」をかかげる今津町にとって、大変貴重な資料となりました。

平成5年6月27日、今津町では琵琶湖周航の歌開示75周年記念事業「われは湖の子」が開催されました。これは三高の卒業生をはじめ多くの人の参加で盛大に行われましたが、この事業の準備段階での事務局の調査で、それまで不明であった作曲者・吉田千秋の詳しい消息が判明したことも大きな収穫でした。また記念事業のシンポジウムの中で、「周航の歌発祥の町の中学校にボート部をつくっては」という声があがり、これは平成7年に実現しました。今津中学校ボート部では平成8年8月に初めての琵琶湖周航で、歌にある雄松ガ崎・長浜・竹生島・長命寺などを訪れ、さらに平成10年には三高OBから寄贈をうけて「千秋・太郎号」と名付けられたフィックス艇も活躍しました。

この他にも今津町では、平成6年4月に今津港棧橋の隣に琵琶湖周航の歌の歌碑が完成、

平成9年6月には周航の歌誕生80周年を記念して「琵琶湖周航の歌音楽祭」が開催されました。また太郎が今津から出したはがきにちなんで行われた「一枚のハガキ全国コンクール」では、琵琶湖への思いを託したはがきが2,814通も寄せられました。さらに平成10年4月、今津港西側にオープンした琵琶湖周航の歌資料館は、開館以来、連日多くの観光客でにぎわっています。

これらの事業は、琵琶湖周航の歌、さらには琵琶湖や滋賀県に思いを寄せる人々の多さを、改めて私たちに実感させることになりました。

おわりに

滋賀県とくに琵琶湖の見える地域で育った人にとって琵琶湖周航の歌は、なつかしさ以上の様々な思いの込められた歌だといえます。NHKが平成元年にアンケート調査をした「日本のうた、ふるさとのうた百曲」では全国で73位、滋賀県ではもちろん1位に琵琶湖周航の歌がランキングされました。

大正時代、二人の若者によって作られた琵琶湖周航の歌は、80年を経た現在、単に人々に歌い継がれるだけにとどまらず、町おこしの起爆剤としての役割をも担うようになっていきます。琵琶湖周航の歌に深い関心を寄せ、歌にまつわる様々な研究をする人も決して少なくありません。

琵琶湖周航の歌は、もはや滋賀県の代表的な歌というだけでなく、滋賀県に大切に残していかなければならない文化財のひとつになっているといえるでしょう。

滋賀文化財教室シリーズ No.180号

発行年月日 1998年10月1日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525